

学芸員 NEWS LETTER

2023.3

立命館大学 文学部

第35号



京都市東山区・五条坂京焼登り窯（旧藤平）発掘調査の様子（2022年9月12日撮影）

目次

■ 五条坂京焼登り窯(旧藤平)の発掘調査と3次元計測—2022年度考古学実習Ⅲ—	2
■ 十和田市現代美術館での実習を通して学んだこと	4
■ 学芸員課程報告	7
■ 京都文化博物館に勤務して(清水智世)	8

五条坂京焼登り窯（旧藤平）の発掘調査と3次元計測 — 2022年度考古学実習Ⅲ —

文学部人文学科日本史研究学域 考古学・文化遺産専攻 教授 木立雅朗

コロナ禍のため、2020年度・2021年度は考古学実習Ⅲの開講が変則的なものになった。2022年度は感染対策に十分に注意しなければならなかったとはいえ、無事、夏期休暇中の2022年8月17日～9月22日に実習を行なうことができた。受講生は6日間、登り窯とその周囲の発掘調査、および SfM-MVS を用いた工房の三次元計測を行なった。

「西の窯、および呂号焼成窯」跡地の発掘調査

①1・2トレンチの拡張

2016年に設定したトレンチを拡張し、「西の窯」8の間とそれを壊して作られた「呂号焼成窯」（石炭窯）の関係について検討した。その結果、「呂号焼成窯」の後裔と想定される石炭窯の基底層を検出したが、その下層に石炭を含む物原層を確認した。呂号焼成窯は改築され、周囲一帯を再整地したことが明らかになった。2016年の調査で「西の窯」の一部だと判断した遺構は改築した呂号焼成窯がこわされてから築造されたものであることが明らかになった。「呂号焼成窯」廃絶後も別の窯が築かれ、さらにその後には別の遺構が作られたことがわかった。

②6トレンチの調査

西の窯の胴木間を発掘すれば、その傾斜角度や規模を明らかにできると考えたが、その想定地点はトイレや電圧装置などのため、発掘することができない。しかし、その北側には僅かな空き地があり、胴木間周辺に繋がる作業空間を調査することができると考えた。また、西の窯が昭和19年に破脚されたため、掘り込みだったと想定される胴木間部分は埋められた可能性が高い。その埋め土には、当時の製品が含まれており、年代の指標になる可能性があると考えた。そのため、胴木間本体を検出することはできないが、重要な知見を得ることができると考え、胴木間の北側に当たる地点にトレンチを設定した。その結果、明治42年に大規模に整地され、その後も何度か盛土・整地されたことが明らかになった。周囲の地形改変が想像以上に大きく、明治末に1m以上の盛土がなされ、その後も何度かにわたって盛土がなされ、更に1m嵩上げされていたことがわかった。

「東の窯」9の間の発掘調査

かつての「東の窯」は現在より傾斜が緩やかであり、途中で盛土をして傾斜を強めている。また、2016年の窯北側の調査では、窯幅を縮小しながら段階的に土を盛り上げていることを確認している。その実態をさらに詳細に確認するため、9の間の中央付近に小トレンチ（7トレンチ）を設置した。その結果、床面は若干嵩上げされていることが確認できた。さらにその下層は盛土が続くことを確認した。窯の保護のためにトレンチを小さく設定した結果、それ以上の掘削ができなかったため、ピンポールを突き刺して盛土の厚さを確認したところ、1mの太いピンポールがトレンチ底から約35cmの深さで石、もしくは窯壁などに突き当たり、止まった。この



1・2トレンチの発掘作業風景



6トレンチの発掘作業風景

ことから、少なくとも、床面から1m以上は柔らかい盛り土であり、その下層も遺物で止まっただけで、盛土はさらに厚かったと想定される。2016年の調査で確認できた窯北側の段階的な盛土を確認することはできなかったが、この地点の盛土が想像以上に厚いことが確認できた。

工房と覆屋の3次元計測

昨年度、早稲田大学と共同で登り窯本体の計測を行なっているため、今回は埼玉県立博物館のナワビ矢麻氏の指導を受け、登り窯周囲の工房や道具類の状況、覆屋の構造を記録した。登り窯の3次元測量はこれまでも進めてきたが、工房全体を3次元測量するのは初めての試みだった。工房は当時の状況を彷彿とさせる残りのよい状態であり、この雰囲気も含めて記録することを目的とした。死角が多く、完全な測量は困難であったが、現状を記録するには新しい試みとなった。

学生の多くが写真測量を行い、現地でノートパソコンを捜査して合成を進めて確認しながら撮影を行なった。合成がうまくいかない場合には撮影を繰り返し、進めたおかげで、学生のスキルが大きく向上した。また、大量のゴウ（匣鉢）を移動しながら、ゴウの計測も行なった。

遺跡をディスプレイする

調査では1の間・2の間の中に保管されていたゴウ（匣鉢）をすべて運び出して写真計測を行なった。旧藤平登り窯に学ぶ市民の会のメンバーの提案によって、それらの半分を元に戻さず、1の間の半分を見学できるようにした。そして、残したゴウで登り窯南側広場に展示場を設置した。ゴウを使った展示台はその後、旧藤平陶芸登り窯見学会10月15日、(11月5日、12月3日)や五条坂ちゃわん坂ネットワーク「わん碗 one 展」で活用され、開晴小中学校の作品展(11月5-7日)が行なわれた。11月5・6日にはその一環として「登り窯にいける」と題した生け花展も開催され(協力:細川未来生流)、登り窯と工房全体が華やかに彩られた。発掘に参加した学生はその様変わりに驚いていた。文化遺産を活用した事例として興味深い展示会だった。

おわりに

感染対策に注意を払わなければならなかったとはいえ、久しぶりに大きな制限のない実地調査・実習を行なうことができた。その喜びと達成感は昨年の実習とは全く違うものだった。京都市内であるため、バスや自転車で通ったが、大学が行なう発掘調査としては、宿泊を伴わない「通い」の発掘現場は珍しい。その上、近現代の登り窯・工房・覆屋の考古学的調査であり、SfM-MVSを用いた点も、一般的な発掘調査とは異なっていた。そうした意味では、新しい文化遺産調査・研究の模索でもあった。徐々に元に戻りつつある観光地の様子を目に見ながら、暑い夏の日々を過ごした経験も、また得難い経験だったと思う。

今回の調査成果が、近い将来、本遺跡の活用計画に役立つよう、遺物の整理と研究を進めてゆきたい。

最後になったが、調査に全面的にご協力いただいた京都市教育委員会教育環境整備室、藤平陶芸、旧藤平陶芸登り窯に学ぶ市民の会の皆様に心より感謝申し上げたい。



9の間 7トレンチの発掘作業風景



ゴウ（匣鉢）を展示台に使用した「わん碗 one 展」

十和田市現代美術館での実習を通して学んだこと

文学部 文化芸術専攻 神谷早紀

・十和田市現代美術館について

十和田市現代美術館は、国の機関の統廃合によって空き地が目立つようになった官庁街通りの景観保全のため立ち上げられた「Arts Towada（アーツ・トワダ）」の拠点施設として建てられた。館内はもちろん、美術館周辺にもアート広場やストリートファニチャー（街中に置かれているアート作品）が点在しており、美術館を中心にアートの輪が広がっていくようなイメージになっている。また、常設・企画展を行っているが、収蔵庫を持たない、博物館法上「博物館類似施設」である。また管轄は十和田市商工観光課である。

・キュレーションについて

十和田市現代美術館の館長のお話を聞いた。館長に就任されるまでは、金沢 21 世紀美術館での勤務やあいちトリエンナーレ 2019 でのキュレーションを務められていたそうだ。金沢 21 世紀美術館は、開館に携われており、レアンドロ・エルリッヒ《スイミング・プール》のキュレーションもされたそうだ。同作品は作家の様々な要望を実現させるなど、多くの試行錯誤があったという。作家の要望と現実的な問題とのすり合わせをどうされているのか質問したところ、4つのステークホルダーの意見を自分の中に持ちつつ、作家とぶつかり合う覚悟で接することが大切だと教えてくださった。4つのステークホルダーは、「作家・観客・出資者・スタッフ」で、それぞれの立場に立って客観的に作品を見ていく必要があるという。そのうえで、作家に「NO」と言わなければならない場面も出てくる。その時ははっきりと否定するのだが、それまでの過程で作家と信頼関係を築いておかないと、本当の喧嘩になってしまう。そのため、日頃の作家との関係性の構築が大切であるということだった。作品の理解や作品に関する知識の吸収も必要なことだが、人間関係の構築も重要な要素であることを初めて知った。

・地域アートについて、住民の視点

十和田市現代美術館では、地域でのアートプロジェクトを多数行ってきた。そういったプロジェクトに開館当初から興味を持ち、積極的に関わってきた住民のお話を、実習のなかでお聞きする機会があった。その方は、十和田市の商店街にある陶器やキッチングッズのお店を経営されており、現在でも、プロジェクトで展示された作品が店内に残っている。その方は、今生きている商店街でプロジェクトを行うことは簡単ではない、としつつ、その分成功した際は面白いものができる、と体験談を交えつつ教えてくださった。また、「この話をする

ことが一番楽しい」ともおっしゃっていた。地域アートが地域住民の方の誇りになることが1つの到達点であると私は考える。そんな姿を実際に見ることができ、今後キュレーションを行っていく上での理想形だと感じた。

・作品メンテナンスについて

十和田市現代美術館は収蔵庫を持たないため、常設作品を展示している状態でメンテナンスを行わなければならない。そのため、お客様がいる状態、または一時的に観覧を中止してメンテナンスを行う。作品は劣化状況の悪い順に修復が行われるため、修復の必要性が低いものは後回しにされやすい。実際、小さな塗装の剥落等はそのままになっていた。また、廃番になった照明作品の器具の交換によって作品の意味が失われないかなど、作家との話し合いが必要になるそうだ。作家と相談をしながら行われているということだった。現代アート作品は、観客との距離がどうしても近くなるため、定期的なメンテナンスの必要性を感じた。実際にメンテナンス作業を行うと、思った以上に損傷や剥落が見られた。また、作品の素材や造形は様々のため、幅広い知識や臨機応変な対応が求められると思った。

・八戸市美術館について

八戸市美術館は、八戸市の「アートのまちづくり」構想の中核施設として2021年にリニューアルオープンしたばかりの美術館である。八戸市美術館の大きな特徴として、「ヒト中心」の施設であることが挙げられる。館内に「ジャイアントルーム」と呼ばれる吹き抜けの大きなエリアがあり、街の人々が自由に滞在し、交流し合える空間になっている。従来の美術館の「モノ中心」ではなく、「ヒト中心」に活動が行われ、広く市民に開かれた施設になっているのだ。

・作品の保存、取り扱いについて（八戸市美術館にて実習）

十和田市現代美術館が収蔵庫を持たないため、代わりに当美術館にて実習させていただいた。収蔵庫は2部屋あり、庫内の湿度が異なっている。これは作品の材質による違いで、湿度が高い方に掛け軸など紙の作品が置かれている。庫内に入る前、入念に手を洗い、手袋を装着した。服装は前側にボタンがなく、ひらひらしていないものを選んだ。実習では、陶器、掛け軸の取り扱い、調査書の記入、を行った。実際に作品を取り扱ってみて、初めの方は緊張から慎重になっているが、後の方は余裕が生まれてしまっていた。学芸員になれば、慣れで更に油断してしまいそうなので、気を付けなければならないと思った。

・ラーニングについて

前述の通り十和田市現代美術館は、観光商工課の管轄となっているため、(元々行われていたが)少し前までは教育普及(ラーニング)よりも観光に力を入れられていた。しかし、最近、ラーニングのスタッフの方が勤務されるようになり、現在では、よりラーニングは充実したものとなった。例えば、「出張げんび」、アーティストトーク、ワークショップ、音声ガイドなどである。こういったラーニングの活動で大切なことは、対象を

予想し、それに応じた内容にすることである。美術館に来るお客様は、初めて来た人、そもそもアートに興味がない人、子供、など多様である。その全ての人をなるべく取りこぼさないよう試行錯誤する必要がある。

・ギャラリーツアーについて

最終日に、ギャラリーツアーを行った。これは、一般のお客様に向けて、自分が興味を持った作品を解説するというものだった。前日のリハーサルで、大きく分けて2つの指摘を受けた。1つは「この作品はこう見える、こう感じられる」というのは何故か、その根拠となる表現について明言する必要があるということだ。作品のコンセプトとディスクリプションを丁寧に繋げることでより説得力のある説明になるということだった。2つ目は、細かい言葉のニュアンスである。小さな言葉の違いで、作品に関する情報が間違っ伝わってしまうことがある。慎重に言葉を選ばなければならないと感じた。本番では、お客様との対話を大切にしつつ、作品のディスクリプションを丁寧に行った。お客様は私の解説に納得している様子もあったが、説明ばかりで堅苦しくなっている場面もあった。今回は初めて来館したお客様ばかりだったため、もう少し砕けた内容にするなど、柔軟に対応をする必要があったと思う。そのためにも、作品を誰よりも深く理解し、お客様の様子までしっかり見る必要があると感じた。

お 知 ら せ

・2023年4月採用予定

平塚市

(文学部 日本史研究学域 考古学・文化遺産専攻 2023年3月卒業)

京都府埋蔵文化財調査研究センター

(文学研究科 行動文化情報学専攻 考古学・文化遺産専修 2023年3月修了)

釈迦堂遺跡博物館

(文学研究科 行動文化情報学専攻 考古学・文化遺産専修 2023年3月修了)

備前市

(文学研究科 行動文化情報学専攻 考古学・文化遺産専修 2回生)

本学学芸員課程修了の皆様

文化財関係業務への就職・転職・勤務・その他異動の際には、お手数をおかけしますが、奥付のメールにご一報下さいますよう、よろしく願いいたします。

学芸員課程報告

2022年度博物館実習

大学指定実習館一覧 (10館・11名)			
地域	施設名	実習期間	人数
京都府	宇治市歴史資料館	10/25～10/28	1名
	亀岡市文化資料館	8/25、8/26、8/30、8/31、9/1、9/2	1名
	京都市考古資料館	8/23～8/27	2名
		9/6～9/10	
	京都市歴史資料館	8/23～8/27	1名
	京都大学総合博物館	8/29～9/2	1名
霊山歴史館	8/23～8/27	1名	
大阪府	大阪城天守閣	8/8～8/12	1名
	大阪府立弥生文化博物館	7/26～7/30	1名
滋賀県	滋賀県立美術館	8/1～8/5	1名
兵庫県	白鶴美術館	8/14、8/21、8/28、9/4、9/11、10/2、10/8、10/30	1名

地方実習館一覧 (23館・25名)			
地域	施設名	実習期間	人数
北海道	北海道立文学館	8/30～9/3、9/6	1名
青森県	十和田市現代美術館	8/23～8/27	1名
東京都	東京都江戸東京博物館	8/24～8/26、8/30～9/1	1名
神奈川県	神奈川近代文学館	8/3～8/7	1名
	神奈川県立歴史博物館	9/7～9/9、9/14～9/16	1名
富山県	富山市郷土博物館	7/25～7/29	1名
石川県	石川県立歴史博物館	8/17～8/19、8/22～8/24	1名
福井県	福井県立歴史博物館	8/19～8/23	1名
静岡県	鳥田市博物館	8/24～8/27、8/30、8/31	1名
愛知県	名古屋市博物館	8/18～8/22	1名
三重県	四日市市立博物館	8/20、8/21、8/24、8/26、8/28	1名
滋賀県	滋賀県立安土城考古博物館	8/23～8/28	1名
	長浜市長浜城歴史博物館	8/22～8/26	1名
京都府	京都鉄道博物館	7/25～7/29	1名
	京都府京都文化博物館	8/22～8/26	1名
兵庫県	神戸文学館	6/20、6/21、6/23、6/24	1名
	兵庫県立考古博物館	8/17～8/21	2名
鳥取県	米子市立山陰歴史館	9/19、9/21～9/24	1名
岡山県	備前市埋蔵文化財管理センター	9/6～9/9、9/14	1名
山口県	下関市立歴史博物館	8/17～8/19、8/22、8/23、8/25、8/26	1名
愛媛県	松山市立子規記念博物館	9/7～9/12	1名
福岡県	九州国立博物館	8/16～8/19、8/21、8/22	2名
	九州歴史資料館	8/23～8/27、8/29～9/2	1名

立命館大学文学部では学芸員課程を設置し、所定の単位を修得した学生に、学芸員資格を授与しています。必修科目の「博物館・館園実習」では、学外の諸施設にご協力をお願いし、学生にご指導いただいております。新型コロナウイルス感染症の影響もある中、御指導たまわりましたことに、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご指導ご協力のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。

京都文化博物館に勤務して

清水 智世(学芸員)

京都文化博物館（以後、当館）は、京都の歴史や文化を通覧できる歴史博物館、美術・工芸品を展示する美術館、そして映画を展示・上映する映像センターとしての機能を備えた、人文科学系の博物館です。1988（昭和63）年の開館以来、年間を通して幅広い分野の展覧会を開催し映像作品を上映するとともに、国の重要文化財に指定されている旧日本銀行京都支店（現・京都文化博物館別館）の公開・活用を行ってきました。京都で学生生活を送るみなさんも、一度は当館を訪れたことがあるでしょうか。後の勤務場所になるとは思いもしませんでした。学生だった私もまた一観客として展覧会を見に来ました。現在は近現代の日本美術（絵画・版画・彫刻）を担当する学芸員として勤務していますが、同僚には考古学や歴史学、民俗学や映画など、専門領域の異なる学芸員がいます。そのことがまた、歴史から美術、映画からアニメまで、不特定多数の方々の興味に合致した展覧会を開催することを可能としています。

私が当館に就職したのは、2017（平成29）年のことです。美術分野を担う学芸員として、少なくとも年間2本の展覧会を担当してきました。当館には「特別展示」と「総合展示」という2種類の展示形態があります。一般的に、博物館が開催する展覧会として思い浮かぶのは、大規模で派手な「特別展示」です。ではもう一方の「総合展示」とは何でしょうか。

館のコレクションで構成された展示のことを一般的に「常設展示」と呼びますが、当館の「総合展示」が担うのは「常設展示」としての役割ではありません。京の通史を紹介した常設の「京の歴史」ゾーンを中心に、そこでは語りつくせないテーマを様々な角度から取り上げた企画展示ゾーン「京の至宝と文化」、「京のまつり」で構成された展示を、当館では「総合展示」と呼びます。京都府が所蔵する作品・資料の展示に限らず、多様で重層的な「京都文化」や「京の歴史」をテーマに、学芸員が各専門性を生かしつつ企画・立案するのが「総合展示」です。「特別展示」に比べて小規模かつ地味な展示ではありますが、最新の調査成果や、これまでの調査・研究の蓄積をご覧いただく場でもあります。私自身は「小牧源太郎展」、「伊藤久三郎展」、「津田青楓と京都」、「さまよえる絵巻—東京・京都 戦時下の前衛画家たち」（板橋区立美術館と共同開催）、「画家・井澤元一と京都」、「京都洋画新人展 1967 - 1973」など、京都の画家をご紹介します「総合展示」を開催してきました。どの展覧会も、作家自身やご遺族、ご所蔵者をはじめとする多くの方々の助けと、先人による研究の蓄積がなければ実現しません。私が「知っていること」をご紹介しますというよりも、「知らないことを知る」過程の先に展覧会があります。

一方で、展覧会を開催することだけが学芸員の仕事ではありません。作品・資料の収集や調査、保存・保管、公開、貸出・調査依頼の対応といった業務の他にも、地域との連携業務および館の重要な役割を担っていただくボランティア関連業務など、他の多くの職業と同様、学芸員もまた多くの業務を抱えています。そしてその数ある業務の一つに、「博物館実習」もあります。もちろん、実際に学芸員になる／なりたいたいと考えている方は限られているでしょう。しかしながら、今後どのような職業に就き、どのような生活を送ったとしても、私たちは自分たちの拠って立つ場所の「歴史」や「文化」から離れて生きることは出来ません。「観客」とは異なる立場で博物館と接し、実際に作品や資料と接する特殊な現場での経験を通して、「歴史」や「文化」を支え、守ることの意味や意義を考え、将来的には、博物館／美術館を支えるかけがえのない一人になっていただければと願っています。



外観



総合展示室

以上長々と学芸員の仕事について記してきましたが、私自身が学芸員になるための模範的な軌跡を辿って来たとはとても言えません。学芸員になることを目標に努力し続けてきたというよりは、先の見えない道をさまよう中で、なんとか「今」にしがみついていたという感覚です。個人として出来ることは限られていますが、それでも出来ないことの中に「先」があることを信じながら、これからも学芸員としての弱々しい歩みを進めていきたいと思っています。長くて短い学生生活の中で、いつどこでどのような出会いが待っているかわかりません。困難な時代ではありますが、「自分」を定めずに、知らないことを知りたいと思う気持ちだけは持ち続けていたいただきたいですし、私自身も持ち続けていきたいと思っています。

2008年3月 立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位修得